

キケンな実験　〈第一稿〉

(原作)

新田次郎「危険な実験」

(登場人物)

保村清三(20) … 大学生

保村洋子(26) … 看護婦

大柴雅樹(23) … 保険会社営業

高城 慧(32) … 医師

西松翔子(17) … 女子高生

西松弘(10) … 小学生

色部教授(60) … 物理学教授

(あらすじ)

保村清三は炎に対して異常な関心を持つ人間であった。やがてその関心は狂気を孕み火災保険金詐欺事件へと発展していく。

○ゴミ捨て場

大きなゴミ袋を抱えた保村清三(20)がゴミ出しに現れる口笛で陽気なメロディーを奏でている
乱暴にそれを投げ捨て、去って行く
ゴミ袋の中に仕込まれた発火装置の赤いランプが点滅している

○公園

街並を一望できる高台の公園薄闇の空に天体望遠鏡を向ける清三
次に街へとレンズを向ける
街の一角が赤ランプの明滅で騒々しい
ゴミ捨て場が火災に見舞われている
黒煙が一筋、高々と昇っている

○同 ゴミ捨て場

焼け跡に群がる野次馬
制服姿の西松翔子が携帯電話で写真を撮っている
忙しそうな消防隊員が忙しく行き交っている

○西松邸

リビングでくつろぐ西松一家
お茶とケーキの準備をする翔

子と母親（47）

○同 弘の部屋

算数ドリルに取り組む弘（三）
傍で清三が解の説明をしてい
る

扉がノックされる

翔子

「先生！ 開けてくれませんか？」

開いた扉の先には弘がおり、盆
の上のケーキを素早くさらう

翔子

「ちよつと！ アンタね！」

椅子に座ったままの清三が苦
笑いを浮かべている

翔子

「先生！ なんとか言つてやつてよ！」

× × ×

弘の勉強を余所に仲睦まじそ
うに会話を弾ましている清三
と翔子

○同 門前

西松一家が清三を囲んで記念
写真の撮影をしている
フレームの真ん中で清三が居
心地悪そうにしている

英一 「先生！ もっと右 はい 寄
って寄って」

タイマーをセットした英一 (49)
が走って輪に加わる

英一 「はい 笑って 笑って」

カシヤつとシャッターが切ら
れる 清三だけが無表情

翔子 「先生」 笑ってよ」

ぎこちない笑顔を返す

○自宅

木造のボロアパート
座卓の下から使い古されたラ
ンプを取り出す清三
慣れた手つきで火を灯す
鞆から資料とノートを取り出
し課題レポートに取り組む

× × ×

ランプが消えている
組んだ腕を枕に寝息を立てる
清三
玄関口の鍵を開ける音で目を
覚ます
保村洋子 (26) が買い物袋を下
げ、帰宅する

× × ×

肉じゃが、目玉焼きなど今晚のオカズが座卓を埋めている

清三が合掌をする

決め事のように醬油を差し出す洋子

洋子 「清三さん？ 今週の日曜日な

のですけど予定は空いていますか？」

清三 「すみません バイトが入つてます」

洋子 「そんなに働かなくても大丈夫ですから…ダメ…ですか？」

清三 「急な用事ですか？」

洋子 「…」

清三 「姉さん？」

洋子 「先月のことです」

清三 「はい」

洋子 「こつ…婚約を申し込まれました」

恥ずかしそうに顔を伏す

清三 「つまり…」

洋子 「プロポーズしていただいたの

で…その…」

嬉しそうに微笑む洋子

○坂道

天体望遠鏡を自転車に括り付け、急な坂道を昇っていく清三
ライト代わりのランプが激しく揺れている

○公園

清三のランプが人気の無い公園に一点明かりを灯している
清三モノローグ

清三

「火を探した サイレンの音を待った 今夜は静かな夜だった」

× × ×

薄手の毛布に包まった清三が朝日で目を覚ます

望遠鏡に差し込む朝の陽光が、玉雫を浮かべた芝面に光の円を描いている

起き抜けの清三がふらふらとその光に吸い寄せられていき覗き込む

激痛が清三の右目に走る

開いたまぶたの内側で、白濁した眼球がギョロギョロと動いている

○大学

右目に眼帯をした作業着姿の清三が入口ホールの清掃をしている

行き交う学生、一角にばか騒ぎしている一団を認める
素早く背を向け、掃除道具を仕舞い始める清三

大柴 「ほくむら君！」

振り返ると愛想良く手を振る
スーツ姿の大柴雅樹(23)が
いる
意味深な笑みを浮かべ手招き
している

○薬品室

色とりどりの薬瓶が整然と陳
列されている
それらを眺める大柴

大柴 「保村君さく 清掃バイト始め
たんだ」

清三 「先輩方が卒業したあとに……」
大柴 「やだよね ダツサイ作業服
しかも大学ロゴ入りとかさ」

清三 「まあ 贅沢は言えないです
から」

大柴 「大変だよね……いろいろさ」

清三 「先輩は仕事良いんですか？」

大柴 「良くはないけど やだよねー
毎日毎日」

清三 「保険会社でしたっけ？」

大柴 「そう 大日生命営業部 やだ
よねー」

清三 「大学には営業で？」

大柴 「……俺のことはいいじゃないか
ねえ 保村 お前さ 家……
大変なんだってな」

清三 「……」

大柴 「お袋さんは死に 義理の父親
は寝たきり お姉ちゃんは
看護婦さん お前は無力な
ボンクラ学生」

清三 「えっ…」

大柴 「そのバイトは幾らに成るんだ？ あと何時間床磨けば普通の学生に成れるんだ？」

清三 「あの…」

大柴 「考えた事ないか なんで自分がって お前はなーんも悪い事なんかしてないのにな お前の半分も努力してない バカが汚した校舎を特待生のお前が綺麗にしてる…」

清三 「誰に…調べたんですか？」

大柴 「ハハハ…皆な知ってるぜ」

清三 「…」

大柴 「可哀想だよ 本当」

清三 「それが言いたくて呼び出したんですか？」

大柴 「やだよねー マジ クソツタレしか居ない世の中だよ」

清三 「何が言いたいんですか？」

大柴 「保険金詐欺やってみないか？」

清三 「えっ…」

大柴 「全部壊して 保険で金にして やり直すんだよ 始めっから」

清三 「急になんですか？ 何なんですか？ 先輩保険屋でしょ？ ダメじゃないですか？」

大柴 「ダメだよ？ 犯罪だもん」

清三 「えっ…ならなんで」

大柴 「ほしいだろ 金」

清三 「…」

名刺を清三の胸ポケットに

無理矢理ねじ込む大柴

大柴 「良きお返事をお待ちしております」

いやに恭しくお辞儀をして

退室する大柴

眼帯の奥の右目が疼いた

○講義室

長机が並べられた簡素な作りの教室

色部教授の講義が行われている

机の上には虫眼鏡とトレイ、黒

紙が並べられている

黒板には太陽光を電気エネルギー

ギーへと置換する簡易図が書

かれている

色部

「皆さんね えーご存知の事と

は思いますが 光の力につ

いてね…」

淡々と進む講義

退屈そうな生徒たち

× × ×

後方の扉が講義の声を遮る
清三が入室する

色部

「またー 君だね…座って」

小さくお辞儀で返す

× × ×

窓際に生徒が集まっている
差し込む陽光を虫眼鏡に当て、
敷かれた黒紙の上に無数の光
の点が現れる
細い煙が立ち昇ると一つが灯
を灯す
一人夢中で見つめる清三

○庭（回想）

10歳の頃の清三が庭先で遊
んでいる
庭の隅の雪だるまに液体を振
りかける
ポケットに忍ばせたチャッカ
マンで火を灯す
激しく燃える雪だるま
笑みを浮かべる清三

× × ×

母の叱責
怒号が残響になって木霊して
いる

○同 講義室

清三の涙に女生徒が気付く

女生徒 「保村君？ 大丈夫」

声を掛けられ自分の涙に気付

く

清三 「！ えっ？ ああ…違うよ
ちよつと目が乾いちゃって」

笑って誤摩化す清三

清三 「大丈夫 大丈夫だから」

○校内

放課後の人気の無い廊下
清掃のバイトをしている清
三

廊下の奥、空っぽの教室…至
る所で燃え盛る炎の幻影を
見る、爆ぜる幻聴を聞く
笑いを噛み締める清三

○自宅

ランプの明かりで図面を引
いている清三
洋子が帰宅する

洋子 「ただいま帰りました」

手に持ったケーキの小箱を
軽く上げてみせる

× × ×

食事を終え、ケーキを突つく

清三 「何か良い事でも有ったんです
か？」

洋子 「ご報告しなくてはいけない事が有ります」

清三 「はい…」

洋子 「お父さんが来週にでも帰ってきます」

口に運びかけていたケーキの一欠けが溢れる

清三 「意識が戻ったんですか？」

洋子 「昨日の遅くに少しだけ目を開いたそうです 完全に覚醒

した訳ではないのですが経過を見て自宅静養でもつ

て… 私ね 来週から事務職に移る事になりました

だから… 昼はヘルパーさん
にお願いし…」

清三 「何処にそんな金があるんだよ！ 借金もあるんだろ？」

洋子 「高城先生がそうしろって…」

清三 「誰ですか…その人？」

洋子 「結婚するんです 私たち」

清三 「それでも他人だろ今は！ 急すぎる」

洋子 「…清三さんと私だって…」

清三 「…」

洋子 「こんな言い方でごめんなさい」

清三 「僕は…」

洋子 「清三さん きつと誤解してます 高城先生に一度会っても
らえませんか？」

ズブズブとケーキを押し潰す

清三

清三 「…今はちよつと…忙しいので」
洋子 「何が気に入らないのですか？」
清三 「そういう訳では…」
洋子 「…もういいです 私たちのこ
とですから」

○ 保険会社 ビル屋上

狭山彰 (30) を筆頭に数人の男
性社員が大柴をランチしてい
る
大柴のスーツ上下が綺麗にた
たまれている

狭山 「狭山彰 行きます！」

羽交い締めにされている大柴
にプロレス技を決める
顔や外傷が目立たない位置を
正確に狙っている
逃げ惑う下着姿の大柴
スーツの上に置かれたケータ
イが着信している

○ 薬品室

西日に照らされた薬瓶が七色
を散りばめている

大柴 「…すごいな！ ああすごいよ」
清三 「計画と図面だけです…」
大柴 「ハハハ やっぱりお前も悪い
ヤツだな」

清三 「…」

大柴 「そう突っ張るなよ 悪人」

清三はただ微笑みで返す

○同 廊下

通りがかつた色部教授が薬品室で話し込む清三と大柴を見つける

○同 薬品室

重い扉をスライドさせて色部が入室する

色部の存在に気付くと大柴は机に拡げた計画書類をそれとなく片付け始める

大柴 「最近の学生はスゴいすね」

色部 「君も最近まで学生じゃないか」

大柴 「：なら この保村は特別っすね」

色部 「卒業生の君が彼に何の用だ
い？」

大柴 「優秀な人材の発掘と基礎教育をねですかね」

色部 「君が教育を語るかね」

大柴 「言いますね 色部さん」

色部 「教授だ」

大柴 「今日はこのくらいで 保村は
いずれスゴい事をやっての
けますよ 教授」

色部 「？」

お辞儀をして退室する清三と
大柴

高笑いが廊下に響いている

○旧家 蔵前

山林に囲まれた白壁の蔵
清三と大柴が入っていく

○同 蔵

ファイルを基に蔵の内部を計
測している清三
埃を被った収蔵品を眺める大
柴

大柴

「文化的な価値がある場合に高
値の補償額を出すプランが
今月扱われ始めてさ…」

大柴の話之余所に黙々と作業
を進める清三

大柴

「一応 遠縁のじじいが受取人
って事になっているんだけ
ど…」

清三

「大柴さん チョークで印とか
付けても大丈夫ですか？」

大柴

「心配ない 人の出入りはない」

× × ×

床一面にチョークで予想軌道
図が引かれている
開けられた高窓から陽光が注
いでいる

清三

「それでは また来週に」

× × ×

蔵の中に無数の望遠鏡が印の
された位置にある
計算と微調整を繰り返す清三
ビールを飲みながら退屈そう
に眺めている大柴

× × ×

清三の目の前を望遠鏡により
収束された光の点がゆつくり
と進んでいく

無数の光が中央の×印で円を
重ねる

×印の上の黒紙が細煙を上げ
ている

○ 講義室

最後列でノートに何やら書き
込んでいる清三

後ろの扉を大柴がノックする
清三へ手招きをしている

○ 薬品室

黄色い蛇革財布から一万円を
20枚抜いて差し出す

大柴 「またな」

札をグジャグジャに丸めポケ

ットに押し込む清三

○西松邸

一家揃ってリビングでくつろいでいる
インターホンが鳴る

○同 玄関

髪を切り、真新しいセーターを着た清三が立っている

○同 弘の部屋

例によつて弘に勉強を教えている
扉がノックされる

翔子 「先生く 開けてください」

清三が扉を開く
弘は眠そうに船を漕いでいる

× × ×

空のマグカップが三つ並んでいる

弘は完全に寝入っている
ベットに腰掛けた翔子が逆さまの雑誌で様子を伺っている
清三が弘にブランケットをかける
お手上げのポーズを翔子に送る

翔子 「先生… このあと時間ありま
すか？」

○公衆ボックス

十円を積み上げ楽しみに電話
をしている清三

話終え、軽い足取りで帰路につ
く

○自宅

玄関に数足の革靴が綺麗に並
んでいる

奥の居間から洋子の話し声が
聞こえる

○同 居間

洋子とヘルパーらしき制服姿
の女性とスーツの男性が話し
込んでいる

そろりと顔を覗かせる清三
一同気付き振り向く

洋子 「清三さん おかえりなさい」

座卓の上には資料が並んでい
る

洋子 「先週お話したと思うけど 急
に決まって… 順番が逆に
なってしまったけど今日から
お父さんも一緒に暮らせる様
になりました」

奥の暗がり人工吸排装置や

種々の医療装置に繋がれた義父が見える

清三モノローグ

清三「父が帰った 義理の父親だけども」

× × ×

時折、バイタルを示す心電図がピツと音を立てる

清三モノローグ

清三「この人は… この人こそ他人なんだ」

× × ×

清三の不気味な笑顔に炎の揺らめきとパトランの明滅が交互に重なる

○取調室

事務机で取り調べを受ける清

三

清三「…」

刑事「誘雷針つというと… つまり

雷を引き寄せる仕組みつとい

うことだな？」

ゆつくりと頷く

刑事「それで雷を受けた誘雷針からア

パートへ配線をする…あとは
停電と火災が起きる…」

薄笑みを浮かべる清三

刑事 「何を笑つとるんだ！ 何を」

清三の首もとを掴み机に押し
付ける

後輩刑事が割って入る

後輩 「先輩 まずいですよ マスコ

ミも騒いでますし…」

刑事 「お前は黙つとけ！ いいか？

これはな立派な計画殺人未遂
なんだよ！ てめーは人殺し
とかわんねーんだぞ！ おい」

後輩 「放火と殺人未遂ですから…暴
力は…ねえ」

清三から手を話す刑事
矛先を変える

刑事 「未遂？ ちがうねコイツの中

にはもう悪が巣食つてるね

いいか？ 情けはいらねえ

マスコミなんて無力だ

人殺しが簡単に改心すると

思うなよ 性根が腐ればな

死ぬまでそいつは悪だ」

つまらなそうに二人の様子
を眺めてる清三

刑事 「なにをニヤニヤしてやがる」

○テレビスタジオ

ワイドショーの収録現場

タレント、政治家、お笑い芸人
などが円卓を囲んで討論をし
ている

司会者の磯辺が事件をまとめ
たフリップの前でカメラに語
りかける

磯辺

「殺伐とした世相を象徴するよ
うな痛ましい事件が発覚しま
した

犯人は大学生 彼は自作の発
火装置を用いて保険金目的の
放火殺人を計画 不幸中の幸
いといえますか 別の放火詐
欺事件の捜査中に未然に防ぐ
事ができた本件ですが 義理
とは言えど家族間での殺人と
いう凶行に及ぶ背景にはいつ
たい何があつたんでしょうか」

女性タレントのヒロミの見解

ヒロミ「この青年はとつても優秀だつ

て話ですけどねえ 秀才だろ
ーが凡才だろーが親をね…狙
うってどんな神経ですか？
あたし本当にとつというヤツ嫌
い もう考えられない」

政治家の関根の見解

関根

「将来を嘱望された人間の闇
彼だって好きでこんなこと

したんじゃないんですよ
私らの時代も本当に貧しかった
貧しい…ひもじい…
そう思ってもね 人は殺さ
なかつた だから私は政治
の道を歩み続けている
彼にもきつと救われる道が
きつとある
やり直せる機会を我々は作
ってやらねばならない
それは政治家として…」

犯罪心理学教授の牧田の見
解

牧田 「今回のケースにおいて彼の置
かれた境遇と言うのが非常
に大きな要因として上げら
れる…」

三々五々、討論が続く

磯辺 「はい それではね 様々な意
見も有りましょうがココで
加害者の姉で被害者の実の
娘にあたる女性が今しがた
警察署から出てきたよう
です 現場から中継です」

○警察署前

報道陣の群れが洋子の登場で
色めく
レポーターの一ノ瀬がマイク
を翳す

一ノ瀬「お姉さん！ お姉さん！」

俯きながら迎えの車に向かう

洋子

運転席にいた男性が迎える

一ノ瀬「弟さんとお父さんの仲は！

ねえ！ おねえさん」

○西松邸 居間

テレビの前で一家四人、釘付け
になっている

洋子に詰め寄る報道陣

翔子が弘の両目を手で覆う

指の隙間から見開かれた弘の
目が一心にテレビを捉えてい
る

○留置所

畳敷きの無機な檻のなかでダ

ラリと寝そべる清三

規則的なリズムで後頭部を格

子にぶつけ続けている

囚人 「うっせーぞ 馬鹿野郎」

止まる事無く、打ち続ける

刑務官の小山内が現れる

小山内「保村くん やめなよ」

清三 「…」

小山内「君はあれだね 来たくて来た
タイプだね」

小山内を睨む

小山内 「だってそうだろ？ 君の様なタイプは止めてほしいと思いつつやめられない：自己矛盾を自ら認めてる 確信犯だね」

清三 「…」

小山内 「気を…悪くしたかな？

面会の申請が来てたけど断つといたよ めんどくさいかと思つて」

清三 「…」

小山内 「勝手に決めるなつて？ 僕は面倒が嫌いだから」

差し入れらしき白い箱を格子の隙間からそつと置く

小山内 「味わつて食べなさい」

片手で無造作に箱を開けると以前、姉と食べたのと同じケ―

キが入っている
一つ掴む

つまらなそうに一口頬張る
止めどなく涙が流れる
手についたクリームを噛み締める

○裁判所

大勢の傍聴人がざわめいている

× × ×

淡々と進行する裁判
退屈そうな清三

× × ×

裁判長がハンマーを二回鳴ら
す

裁判長「被告 保村清三を有罪とし…」

刑務官が号令を発す

刑務官「これにて閉廷」

○ 刑務所

コンクリート壁に囲まれた木
造の建物

○ 同 カウンセリング室

カウンセラーの佐藤が温和な
表情で語りかける

佐藤 「どうだい？ 研究の方は進ん
でいるかい？」

清三 「…」

佐藤 「君のノート見させて貰ったよ
大したものだね 目的は…
その…別としても 誰にだ
って出来る事じゃない
才能なんでものは意図しな
い形やタイミングで芽吹く

ものだよ

そう きつかけだと思えば
良い 君のところが落ち着
いてココを胸を張って出る
日がきつと来る

その時にその力を社会に役
立てれば良い

償いなんていうとちよつと

大げさかもしれないけど

はは…あせることはないさ」

一心不乱に放火装置の図面
を書き続ける清三

○ 同 庭

雷鳴が微かに聞こえる曇天
模様のある日

清三がアルミで出来た銀色の
凧を冬の空に飛ばしている

刑務官が走り寄ってくる

刑務官「何してんだ！ コラー保村」

大声で笑いながら凧を走らせ
る

刑務官「危ないだろーがー 雷聞こえ
んのか」

からかうように逃げながら雪
の舞い出した庭を走る

○ 病院 廊下

タンカーで運ばれてくる清三

苦しげな息づかい、高熱を発している

○同 処置室

救急隊員の尾関(36)が清三の横たわるタンカーの前で立ち尽くしている

二人の医師が入り口前に立ちはだかる

医師A 「当病院は一般の方々を優先的に診察したおり現在これ以上の受け入れは難しいんですよ」

医師B 「お引き取りください」

尾崎 「この雪で交通網はパニック状態ですから…搬送先が決まるまでだけでも…事前にご連絡した通り特殊な患者さんなものですから」

医師B 「悲劇の苦学生ですか？」

医師A 「救うべき命を優先しているだけのことですから」

尾関 「救うべき…命…ですか」

三人の背後に洋子が現れる

洋子 「…私が処置しますので」

深々とお辞儀をする洋子

尾関 「貴方は？」

医師A 「保村さん 弟さんだっけ？」

医師B 「君は…医師ではないだろ？」

黙ってタンカーを押していく

○同 倉庫

半分物置の様な状態の一室

目を覚ます清三

傍らで寝息をたてる洋子

洋子の前髪にやさしく触れる

目を覚ます洋子

そつと清三の顔に触れる

瞳から涙が落ちる

無言で立ち去る洋子

× × ×

夜、ベットで眠っている清三を
ランプの明かりが照らす
目を開けると高城慧(32)が立
っている

高城 「清三君？ 起きてるかい？」

身体を起こす

高城 「僕は一応 君の担当医になる

高城です」

清三 「この病院はランプなんて使っ
ているんですか？」

高城 「…ああ 君が好きだと聞いた
からね ここに置こうと
思ってた」

清三 「…」

高城 「洋子に聞いたんだ」

清三 「貴方が姉さんの婚約者？」

高城 「いやフラレてしまったよ」
清三 「…僕のせいですね」
高城 「そうかもしれない」
清三 「回りくどい言い方をしますね」
高城 「それは私が彼女を諦めてしま
つたらの話だろ？」
清三 「はは…ロマンチストですね」
高城 「言うじゃないか」

二人の間に笑いが起きる

高城 「体調はどうかかな？」
清三 「生きてはいるみたいですね」
高城 「まるで死にたいみたいな言い
方だね」
清三 「…」
高城 「あまり命を軽く考えるのはよ
した方が良い」
清三 「普通の人ならそうでしょうね」
高城 「君も凡庸な一人だよ」
清三 「犯罪者ですけど」
高城 「…感傷かい？ 償えば良いさ」
清三 「先生はずいぶん寛容な人です
ね 点数稼ぎですか？」
高城 「未来の弟くんに？」
清三 「残念ながら 僕と姉さんはも
う他人ですよ」
高城 「…」
清三 「無駄なことです」
高城 「洋子はそんな風に思っていない
けどね」
清三 「何故ですか？」
高城 「逆に聞こう どうして君は高
熱で倒れたはずなのに病院の
ベットで眠っていたのかな？」
清三 「…」

高城 「もう一つ ここは君のお姉さ

んが務める外部の病院だ」

清三 「姉さんは僕を憎んでいる」

高城 「そうかもしれない」

清三 「アンタの言い方は回りくどい

んだよ！ アンタも被害者の

一人だろ？」

高城 「そうかもしれない…君の咎め

る理由はいくつもあるはずな

んだけど 不思議と君を初め

て見た時にそんな考え忘れて

しまったよ 家族でも友人に

もなつてないのに何とかしな

いとつて…理由になつてない

か」

清三 「…」

高城 「きつと諦めたくないんだな

それだけだよ」

清三 「…理由になつてないですよ」

高城 「そうだね また明日話す事に

しよう ああ それとちや

んとした病室に移れるから

今日はココで我慢して」

清三 「…わかりました」

○同 病室

入り口の前の刑務官に一礼し

入室する高城

清三が本を読んでいる

高城 「護衛付きの患者さんは君が初

めてだ」

清三 「監視でしょ？ 犯罪者なんで」

高城 「そうだな…悪かった」

清三 「事実ですから」

高城 「体調はどうかね」
清三 「医者みたいな事を聞きますね」
高城 「医者みたいなものだからね」
清三 「先生はジョーダンが通じる人
なんですね」
高城 「たしなむ程度にね」
清三 「…」
高城 「まだ芳しくないみたいだね」
清三 「いえ：大分マシになりました」
高城 「そうか」
清三 「もつと早く先生に会っておけ
ばよかった」
高城 「洋子と付き合うより君に会う
までの方が長かった気がするよ」
清三 「姉さんは簡単でしたか？」
高城 「いや？ 難攻不落もいいところ
だった」
清三 「ハハハ 奥手というか：気難
しいのか…」
高城 「洋子はココに来てる？」
清三 「いえ 元気にしていますか？」
高城 「最近はあまり顔を合わせてく
れない 君が運び込まれた時
に久しぶりに話したくらいだ
から」
清三 「そうですか…」
高城 「面会にも来ないのかい？」
清三 「ええ 一度も」
高城 「…」
清三 「当然といえば当然でしょ？
一番の被害者は姉さんです
から 恨むに決まっています」
高城 「でも家族だろ？」
清三 「義理です 再婚相手の連れ子
同士」

高城 「知らなかった」

清三 「ボクら変わってるんですよ
もう十年近く一緒に住んで
同じご飯を食べているのに
お互い敬語で話すんです」

高城 「仲が良くないから？」

清三 「どうですかね？ 普通に家族
してたと思うんですけど

僕がバカな事をする前まで
は」

高城 「後悔してる？」

清三 「どうですかね… 始めは楽し
くってしかたなかったから」

高城 「…楽しい？」

清三 「初めて放火したのは…そう小
学生の時に…雪だるまに灯
油を…ああ…そうだ…母が
真っ赤になっておこつてい
たっけ…」

高城 「このままだと社会に戻れなく
なるよ」

清三 「ココを出てムシヨに戻って…
その後何処に行けば良いんで
すか？ 何処が受け入れてい
れるっていうんですか？」

高城 「また勉強を始めれば…」

清三 「いい加減なことを…大学も除
籍になった 世間は僕のこと
を忘れてはくれないんで

すよ この殺人未遂の放火
魔を」

高城 「…」

清三 「テレビを見ました… 僕はオ
モチヤでしたよ 国民の暇

つぶし」

高城

「私は違う 人は環境が作ると

思ってる 刑期を終えたら

連絡してくれ…力になりた
い」

連絡先を書いた紙を清三に渡
す

高城

「もう休むといいよ」

○ 刑務所 廊下

鉄格子を抜けると刑務官が手
錠を外す

日の差し込む廊下をゆつくり

歩く清三

ふと立ち止まり窓外を眺める

陽光が清三を照らす

強い明かりに包まれる

○ 同 個室

夜、天井窓をこつそり開ける清
三

闇の中で蠢く鼠

× × ×

皮を剥がされた生きた鼠が机
の上でキーキーと悲鳴を上げ
ている

薬品を混ぜたペーストの白い
物体を丁寧に塗っていく

仕上げとばかりにガラス瓶の

液体を一滴、一滴と垂らす
滴り落ちた一滴が煙に変わる
鼠の悲鳴が悲痛さを訴える
煙の下に蒼白い炎が灯ると鼠
の身体が一枚の紙切れの如く
易々と燃える
揺れる日が笑顔で歪む清三を
照らしている

○病院 診察室

高城が検診をしている
看護師の安原（よ）が電話をと
る

安原 「先生？ 外線ですよ」

振り返る高城

高城 「どちらからですか？」

耳元まで近づく

安原 「刑務官の方からです」

高城 「そうですか…」

○同 喫煙所

同僚の前田と高城が煙草を
噴かしている

前田 「やめたんじやなかったのか？」

高城 「控えてただけ」

前田 「院長のご息様はストレス溜
まるって」

高城 「いやな言い方するな」

前田 「俺さ近くココをやめるよ」

高城 「大学病院は性に合わないか？」

前田 「まあ 田舎戻って嫁さん貰ってじっちゃんとはっちゃん

の茶飲み友達しながら細々

暮らす」

高城 「それはそれは 壮大な夢だな」

前田 「だろー？ 応援してくれよ」

高城 「ならさ…ちよつと相談なんだけど…」

○ 刑務所 面会室

ガラス越しに向き合う清三
と高城

高城 「苦労したよ…なんでまたあんな物が必要だったの？」

刑務官が丹念に差し入れの
スノードームを調べている

清三 「落ち着くんですよ 昔から」

高城 「…確認しとくけど」

清三 「アリガトウゴザイマス」

話の途中で席を立つ清三

高城 「おい！ 清三くん！」

○ 病院 喫煙所

前田 「無水グリセリン？」

高城 「まとまった量な」

前田 「断る」

高城 「だよな普通ほしがるのはおか

しい」

前田 「どうして必要なんだ？」

高城 「頼まれた」

前田 「ヤバい話か？」

高城 「わからないし… 純粋な動機か
もしれないし…あるいは」

前田 「話が見えないな」

高城 「そうなんだよ… ただ… 信じ
てみたいんだ」

前田 「そうか… でも断るよ」

高城 「そうだよな 懸命な判断かも
しれない」

白煙を吐く二人

○ 同 刑務所

夜、机の上の巨大スノードーム
を裏返し蓋を開ける

ガラス瓶に中の液体を注ぐ

検査キットで成分を確認する

無水グリセリンからニトログ
リセリンを生成する

× × ×

衣服を脱ぎ皮膚に例のペー
スを塗りたくる

ガラス瓶に入ったニトログリ
セリンに指先を付ける

煙が上がったのち青い炎が指
先に灯る

燃え上がる清三の肢体

揺らめく炎と清三のシルエ
ット

絶叫とも悲鳴ともつかない清
三の笑い声が廊下に木霊して
いる

○病院 手術室

医師たちが扉の前でバリケ
ドを作っている
救急隊員を押しつけ清三に駆
け寄る洋子

洋子

「助けて！ 助けてください…
この子を死なせないで！」

立ちはだかる医師たち
泣き崩れる洋子

○同 廊下

時折、嗚咽を漏らしながら震え
る手で清三の処置をする洋子
白衣を握った高城が駆けつけ
る
黙って洋子の手から器具を取
り上げると手術室にタンカー
を押ししていく

○手術室

Yシャツを血で汚しながら傷
口の処置をする高城と洋子
洋子が震える手で器具を差し
出す
視線が合う二人
今にも泣き出しそうな高城が
クシヤクシヤの顔を見せる

× × ×

包帯に包まれた清三が手術台
で眠っている

○同
廊下

ベンチでぐつたりと座り込む

高城

ホットコーヒーを持った洋子が
隣に座る

洋子

「私には寝たきりの父がいます
罪を犯した弟がいます
家には借金もあります
人に誇れるものなど有りま

せん

きつと貴方には釣り合わない
平凡な女です

きつと貴方のご家族も私を
私たち一家を快くは思わな
いでしよう

こんな…こんな女ですけど
貴方が必要です
心から必要です

いままでいくつもワガママ
を言いました

だからこれが最後のワガマ
マです

もう一度 もう一度だけ私
にプロポーズをしてはくれ
ませんか？」

握りしめたカップからコー

ヒーが溢れる

洋子 「もう一度私を好きだと言つてはくれませんか？」

眼鏡をはずす高城

洋子の肩に頭をあずけ目を閉じる

○病室

包帯で全身を巻かれた清三が窓外の雲を眺めている
洋子が入室する

洋子 「死ぬ事で許されると思った？」

清三 「…」

洋子 「目を見なさい 清三」

清三に一步一步と歩み寄る
俯く清三の頬に手を置き視線を合わせる洋子

洋子 「私の目を見なさい 清三」

洋子に母の面影が重なる

洋子 「貴方は死んではならない
犯した罪を噛み締めて生きなさい

許されないと知りながら
だからこそ生きなさい
生きて 生きて 生き抜いて
自分が犯した罪が許されないのだと知りなさい」

洋子の瞳の中に炎を見た
微笑を浮かべる清三
清三モノローグ

清三 「第三の実験は成功した」

完